



◆ ランカスター通信 (2) ◆

— 肌で感じる語法 —

投野 由紀夫

アメリカで生活して、帰ってくるころには結構アメリカ発音や会話表現に堪能になって、自分でもかなり話せると思っていた。ところが、今回イギリスに来てみて、その英語の違いやイギリス英語といっても何を基準にしたらいいのか、本当に難しいものだとあらためて感じている。

アメリカ英語とかなり違うなぁと感じた日常会話の英語をいくつか紹介しよう。まずはあいさつ。「元気? やあ?」というのに How are you doing? はまあ使うが、アメリカでよく言う How is it going? とか What's up? などはあまり言わない。Hi ya? / How are things? というような表現がアメリカ南部にいた自分には新鮮だし、女性が特に言うのが Are you all right? だが、最初はなんと答えたらいいか結構悩んだ。なんだか自分は困った顔をしているのかなあと不安になった時期があったが、これは単純に出会い頭の挨拶である。Yes, thanks. Are you? などと答える。

次に、「ありがとう」これはおもしろいのだが、very much をつけると Thanks very much. のほうが普通だ。Thank you very much. というイギリス人は私の知る範囲では少ない。その代わり Thanks. Thank you. はどちらも聞く。アメリカ英語にあまりない indeed をくっつけて Thanks very much indeed. というとてもいい感謝になる。またイギリス特有の「ありがとう」は Cheers. これはこちらに来てから耳タコになるくらい聞く。アメリカでは「乾杯!」くらいでしか使わないのでは。

それから、あいづち。アメリカ英語では OK. とか Yeah. Exactly. などいろいろ言うが、こちらでは OK. はあまり言わない。頻繁に聞くのが、Right. それもかなり「ウラーイト」という感じで長めに言う。OK. は話の先頭にもってきて「では、それじゃあ」みたいな感じで使うが、Right. もまったく同じように文頭でも使う。だから話が少し途切れると Right, well, I must go. などと言って

別れたりする。このあいづちを使うだけでかなりイギリスに住んでるっぽくなるのが不思議だ。最初はなんだかキザっぽくて抵抗があったが最近をよく使うようになった。

こっちに来てから初めて知った生活用語もある。ちょっと語彙力のなさを露呈してしまうが、知らなかったのがまず hob という言葉。これは oven の上のコンロのことをいう。缶詰などには on the hob と in the oven と2通りの調理の仕方が書いてあることが多い。少しフォーマルだと stove top instruction などと書いてある。アメリカで自炊していたころの表現をいろいろ思い出してもイギリスでは役に立たないことが多い。

それから語彙がかなり違うのが天気予報。アメリカはユーモアたっぷりに entertain する感じの天気予報が多いのだが、こちらは3分以内でどれだけ要領よく情報を伝えるかが決め手とでも言わんばかりに次々と天気情報をしゃべっておしまい。日本のNHKなどの天気予報はこれに比べると非常におおらかな感じがする。さて、語彙と言えば最もイギリス英語で違うなぁと思ったのは風の表現が多いこと。それも strong wind で通じるのに、gale, gust, breeze などという言葉を使い分けるのでパッと聞いてわかるまでに時間がかかる。アメリカでも風の強い地方に住んでいたなら、ひょっとすると同じような表現を聞くのかもしれないが、少なくともイギリスでは風に関する情報は細かい。

その他、Probably の代わりに Presumably ということが多いとか、いろいろあるがこのへんにしておこう。最後に、イギリス英語と言っても方言がたくさんあるから、どれをスタンダードとしてまねたらいいか悩む。BBC English がやはり基準のようだが、ランカスターではそういう話し方をするとかえってキザっぽく聞こえそう。

案外、どういう英語を身につけるかは奥が深いのである。